

令和7年度 全国学力・学習状況調査の結果と考察

今年度、文部科学省は「全国学力・学習状況調査」を以下のとおり実施しました。

【調査日】 中学校 国語・数学 4月17日（木） 理科4月14日～17日の1日（本校4月15日実施）

教科に関する内容については今年度の結果を分析、学習状況調査については昨年度や今年度の市内、奈良県、全国の中学校の数値とも比較しながら本校の今年度の傾向を考察しています。

【教科に関する調査結果と概要】

令和7年度の全国学力・学習状況調査の国語と数学の教科に関する調査の本校の平均正答率、理科のIRTスコア（500を基準にした得点）を以下に示します。今回の教科に関する調査結果について、文部科学省・国立教育政策研究所によると、以下のように概要が述べられています。

【国語】「自分の考えが伝わる文章になるように、根拠を明確にして書くことに課題が見られた。」

【数学】「あらかじめ書かれている図形の証明を評価・改善することに課題が見られた。」

【理科】「化学変化を原子や分子のモデルで表わすことに課題が見られた。」

本校でもそれぞれの課題を検証していきます。

【国語】

全体としての正答率は全国とほぼ同じ値を示しています。思考力・判断力・表現力等の「読むこと」に関する問題では県・全国の割合と比較して上回っていますが、その他の「話すこと・聞くこと」及び「書くこと」、知識及び技能の「言葉の特徴や使い方に関する事項」についてはほぼ同じくらいの値となっています。しかし、無解答率については、「書くこと」において、読み手の立場に立って、表記を確かめて、文章を整える内容の問題が特に高い値が出ています。この問題は、手紙の下書きを見直し、誤って書かれている漢字を見付けて修正する内容であり、普段から習得した知識を生かしながら文章を推敲する学習の工夫をする必要があると考えられます。また、「読むこと」において、根拠を明確にして考える内容の問題も無解答率が高い値となっていました。伝えたいことの根拠を明確にして書くことを通して、根拠を明確にした思考を習得する指導の工夫が期待されます。

【数学】

平均正答率は、全体やそれぞれの領域や評価の観点において、いずれも県・全国の値と比較してほぼ高い値となっています。知識・技能よりも記述や文章題など問題文を読みとって立式したり、表現したりする力が求められる思考・判断・表現の方が県や国と比較すると高い値を示しています。しかし、正答率は4割程度で、無解答率も知識・技能を問う問題よりも高くなっています。特に、説明をしたり、証明をしたりする内容の問題で無解答率が高くなっており、数学的な用語や表現について知識を習得し、その知識を活用して理解を深めた学習で粘り強く問題に取り組むことを通常の授業の中でもさらに工夫をして取り組む必要があります。生活に結びついた数学的な考え方や想像力を高め、そうした経験値を増やししながら主体的に調べたり考えたりする課題を取り入れていくことでさらに力をつけていきたいと考えています。

【理科】

CBT(Computer-Based Testing の略、PC 上に映される問題に解答していく試験)問題は、公開問題と非公開問題で構成され、公開問題には全日程に共通する問題と実施日により異なる問題があります。非公開問題は、生徒ごとに異なる問題を解くことになります。生徒一人が解く問題数は26問で、このうち公開問題10問、非公開問題16問となっています。非公開問題については、結果の公開ありません。公開されている問題については、問題ごとの正答率は分かりますが、領域全体の傾向は公開されていません。

本校は、IRT スコアは全国と比べて2ポイント、県とは13ポイント高くなっています。IRT バント分布からも5段階のうち3~4の割合が高いです。共通問題に関しては、電熱線を利用した回路の電流・電圧と抵抗や熱量に関する知識及び技能の習得や元素記号を表わすことに関する知識及び技能に関する正答率が県・全国と比べて特に高い値となっています。一方、探究の過程を振り返る記述の問題については正答率は県・全国と大きく差はないものの無解答率が他の問題に比べて高く、表現について課題があるといえます。授業においても、学習に対する自分の振り返りなどを言葉で表現することに工夫した指導がさらに必要であると考えます。

【基本的な生活習慣について】

「毎日、同じ時刻に起きている・寝ている」や、「朝食を毎日食べている」と回答した生徒の割合は昨年度とほぼ同じで、市・県・全国と比較してもほぼ同じぐらいの値になっています。このことから、本校では概ね基本的な生活習慣が身についていると思われます。ただし、「毎日同じぐらいの時刻に寝ている」生徒の割合は、県・市と共に80%を切っており起床・朝食の割合と比較しても12%程度の差があることから、夜同じ時刻に寝ることが難しい状況が続いていると考えられます。睡眠不足は、成長期である生徒の体の成長にも影響を与えたり、熱中症などの体調不良につながったりする要因ともなるため、生活リズムを整えることが必要であると考えます。

【自己肯定感・自己有用感について】

「自分にはよいところがある」と思っている生徒の割合は87%を超え、昨年度より6.7ポイント増えています。市・全国も85%を超え、市は本校とほぼ同じぐらいの値です。一方、「先生は、あなたのよいところを認めてくれている」については市・県・全国と比べて低い値になっています。授業だけでなく、普段からありのままの自分を大切にすることや自分らしさを認めることの大切さについて考える時間を持ち、教職員から生徒のよさを肯定し、認めたことを努めて表現することが必要であると考えます。「人の役に立つ人間になりたい」と考える割合は昨年度より1.7ポイント増えて96%を超えています。引き続き自分らしく生きていく将来の自分をイメージし、自分に必要な力を付ける学びを安心してできる環境の整備に努めます。

【人権意識等について】

「いじめはどんな理由があってもいけない」と考えている生徒の割合は、96%を超えており、昨年度より0.5ポイント増えています。しかし、「人が困っているとき進んで助けている」生徒の割合は昨年度より1.8ポイント減り、市・県・全国と比較しても低い値を示しています。「困りごとや不安がある時に、先生や学校にいる大人にいつでも相談できる」と答えた生徒の割合は5.1ポイント増えていますが、市・県・全国と比べると低い値であることから、教職員に安心してSOSを発信でき、それを受けとめられる環境の整備がさらに必要であると考えます。心に余裕を持って困っている人を進んで助けることができる生徒を育てると共に、生徒自身が安心できる環境の構築に努めます。

【学校生活等について】

今年度「学校に行くことが楽しい」と回答している生徒の割合は、昨年度に比べて4.2ポイント増えていますが市・全国と比較して低い値になっています。しかし、「友人関係に満足している」の回答は、昨年度より3.3ポイント増え、市・県・全国と比べて高い値で、「普段の生活で幸せな気持ちになることがある」と回答した生徒の割合は90%を超えており、友人関係の満足度と似た値を示しています。市・県・全国と比較しても高い値であり、日々の生活を充実して過ごしている生徒が多いと考えます。1日の多くの時間を過ごす学校生活が充実したものになるように、日々の生徒の様子を丁寧に見守り、取り組んでいきます。

【主体的・対話的で深い学びの視点から】

「話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができている」の値は、昨年度より2.1ポイント増え、市・県・全国との比較でもやや高く、主体的に学習しようとする姿勢の定着がみられます。しかし、「学習した内容について、次の学習につなげることができている」の値は昨年度より2.5ポイント減り、「授業で学んだことを、次の学習や実生活に結びつけて考えたり、生かしたりすることができる」の値も昨年度より7.9ポイント減っています。学習した内容について見直したり、次の学習に生かしたり、さらに実生活に生かしたりすることは、これからの社会で求められる力です。学びの力を高めるために、日々の授業を見直し、主体的に学ぶことのみならず、学びをさらに深められる指導の工夫に研鑽を積んでいきたいと考えています。

【タブレットの活用について】

昨年度までの本校のタブレット使用率はきわめて低く、本校は、教職員の研修をはじめタブレットの活用が大きな課題となっていました。文房具の一つとして活用することも当たり前となる昨今、今年度の本調査の生徒への質問内容にも変化があり、ICT機器を活用した技術の習得状況を問う内容となっています。タブレットの使用頻度については、昨年より44.1ポイント増ですが、県・全国と比べると市と共に低い値となっています。授業以外にデジタルドリルでの活用などさまざまな機会を通じてタブレットを活用しつつ、授業の中でも意見を共有したり、協働で作業したりする等の活用で学習の効率化を図り、ICT活用の推進に努めます。